

平成 27 年度

# 「高志の国文学」情景作品 コンクール入選作品集

【主催】

富山県・富山県教育委員会  
富山県中学校文化連盟  
富山県高等学校文化連盟



# 発刊に寄せて

富山県知事 石井 隆一

富山県教育委員会 教育長 渋谷 克人

近年、少子高齢化や人口減少、グローバル化が進展するなか、「元氣な富山県」を創るためには、富山県を築いてきた、先人の志やチャレンジ精神に学び、ふるさと富山県に心の根っこを置きながら、本県はもとより全国や世界の舞台で大いに活躍できる人材を育成すること、すなわち「人づくり」が重要です。

また、本県では、昨年三月に北陸新幹線が開業し、さらなる飛躍に向けた絶好の機会を迎えており、夢や希望、高い志を持って、「とやま新時代」を力強く切り拓いていくことができる人材が求められています。

このため、県では、ふるさとの自然、歴史、文化、産業などに関心を深め、ふるさとへの誇りや愛着を育む「ふるさと教育」の推進に積極的に取り組んでいるところです。

このコンクールもその一環として平成二十二年度から実施しており、第六回となる今年も、ふるさと富山の魅力、先人の知恵や生き方への素直な感動やあこがれが、瑞々しい感性で表現された素晴らしい作品が数多く集まり、大変うれしく、頼もしく感じています。

皆さんの未来には、無限の可能性が広がっています。今後、難しい問題にぶつかることがあると思いますが、決してあきらめず、情熱を持って果敢にチャレンジしていただきたいと思えます。そして、皆さんが生まれ育ったふるさとへの誇りや愛着、家族や地域の方々との絆を大切にしながら、富山県の未来を切り拓く人材へと、大きくたくましく成長されることを心から期待しています。

## 文芸部門

### 知事賞

「時を呼ぶ声」を読んで

#### 拝啓、久世光彦先輩

富山高等学校二年 松田 梨子

高志の国文学館で開催されていた企画展、「あの日、青い空から——久世光彦の人間主義」を見に行ったことをきっかけに、私は久世光彦の「時を呼ぶ声」を読むことになった。久世光彦が手がけた数々の有名なドラマは、どれも私の知らないものばかりだったけれど、私が毎日通っている学校で、同じように青春時代を過ごした久世先輩のエッセイを、どうしても今、読んでみたくなったのだ。

読み進むうちに、私はある点について深く考え始めていた。それは「記憶」と「思い出」の違いだ。「人間は、昔のことをこんなにも鮮明に覚えていることができるのだろうか」という疑問が、入道雲のようにむくむくと私の心に広がる中で、その答えを自分なりにさがしてみた。たしかに、つい昨日のことのように書きつづられた文章だけれど、その中に、センチメンタルなものを、私はそれほど感じなかった。内容は、繰り返された転校のことや、戦争のこと、時には恋愛のことなのに、どこかサバサバした強い人間の目を通して描かれているという感じを受けた。決して、久世光彦が「冷めている」ということではなく、どこか客観的に物事を見る力が、少年の頃からあったのではないかと考えた。そこに、悲しいとか切ないとかいう気持ちをプラスしたものが「思い出」なのかも知れない。エッセイの中で、久世光彦は、戦後間もない頃の富山の夏の空が青く美しかったと書いている。それは、正確な「記憶」なのだと思は思う。戦争について考え出したら、様々な感情が込み上げてくるかも知れない。しかし、久世少年は、空の色を「思い出」としてではなく、「記憶」としてとらえる目を持っていたのだと思う。

久世光彦は、才能にあふれ、素晴らしい仕事をした人だ。しかし、小学校高学年の時に、初めて立山登山を経験し、感激したことや、高校時代に、喫

富山には、山と海に育まれた文化があります。古代より人々は、四季折々に美しくも厳しい富山の自然や人を題材に作品を創作してきました。そのような自然や風土の中で生まれた文学作品を通じて、郷土の先人の心や優れた知恵にふれ、感じた情景や心情を文芸、美術、写真で表現することで、ふるさとの魅力を知り、愛着や誇りをもつきっかけとなるように、平成二十七年「高志の国文学」情景作品コンクールを実施しました。今年度は県内中学生・高校生から二七五五の応募がありました。

富山県の未来を担う皆さんが、先人の喜び、悲しみ、悩み、感動などを伝えるふるさと文学に接することは、郷土の歴史や文化を再認識し、ふるさとの良さを継承、発展させていくための大切な手立てです。そのため、県教育委員会では、高志の国文学館を拠点としたふるさと文学の振興など、「ふるさとを学び楽しむ環境づくり」を重点施策とし、「ふるさと教育」の推進に積極的に取り組んでいるところです。

この作品集には、中高生がふるさと文学への感動をもとに、新たな創作に取り組んだ作品がまとめられています。この冊子が、新たなふるさととの良さと魅力の発見につながることを期待します。今後ともふるさと富山の文学に親しみ、読書活動を深め、自分とふるさと、そしてこれからの人生について考えるきっかけとしていただくと心から願っています。

#### 入選作品集の利用にあたって

- 入選作品の原作紹介のために、初出の作品に読書案内のコラムがあります。
- 文芸部門については、冊子の構成上、ジャンルごとにまとめて掲載しました。
- 美術部門・写真部門は入選順に掲載しました。
- 入選作品集は、「富山県 生涯学習・文化財室」のホームページからダウンロードすることができます。

茶店で友と語らっていたというエピソードを知ると、とても親近感がわく。その部分だけで言うと、私たちが、何ら変わりはないとさえ感じてしまう。

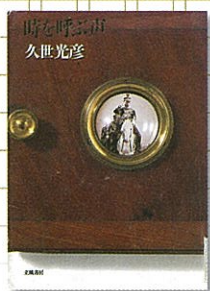
今、私は、ひとつのメッセージを受け取ったような気がしている。久世光彦は、「心の自由を失ってはいけないよ」と語りかけてくれているのではないだろうか。人生という長い旅の途中には、困難なことや、苦しいこともある。しかし、真実を見つめる強い目を持ち、「心」まで縛るものは何もないと信じて生きて行つて欲しいという声が聞こえる。

本を読み終え、私は友人と喫茶店「チェリオ」を訪れた。苦いコーヒーを飲む勇気はなく、私はチョコレートパフェを注文した。久世先輩が語り合っていたこの店で、私も友人といろんな話をした。進路のこと、将来のこと、恋のこと。悩みや迷いの多い十七歳だけれど、心の自由を失わず、人生を歩いていくつもりだ。

#### 時を呼ぶ声

久世 光彦／著 立風書房刊

五つの小学校を転々とした少年期、富山市の空襲の夜の恐ろしいほどの美しさ、軍人だった父の晩年、歌や映画への傾倒など演出家・作家久世光彦が自らの原風景をつづる、珠玉の自伝的エッセイ集。



### 「おおかみこどもの雨と雪」を読んで

呉羽高等学校一年 北田 実希

私は、主人公の都会から田舎への引越し、その生活や考え方の変化から、主人公と同じように田舎の人たちに学んだことがあります。それは、自分の生活の中にある風景で、当たり前のことだったのが都会では違うのだということ。また、田舎の人たちの優しさ、温かさもこの本から改めて感じることができたと思います。

葦崎のおじさんが、初めて自分の畑を作る主人公に土を耕すところから教えている場面があります。「もうひとつの休耕田も耕せ。」と葦崎のおじさんが言ったのに対して、花は三人食べる分だけだから、と断りましたが無理やり耕させていました。私も花と同様になぜもうひとつの休耕田まで耕さなければいけないのか分かりませんでした。ですが、畑でじゃがいもがたくさん穫れ、里の人たちに配り歩いていた時にやっと意味が分かりました。ある人は、じゃがいもがイノシシにやられてしまったので助かると言い、その人から代わりに大根をもらっていました。他の人からは米、別の人からは卵をもらう場面に、里の人たちの助け合いの心を感じました。これは、野菜や作物を作っているからできることで、都会で自分たちが食べる分だけお店で買う人々にはできません。また、食べ物や物だけではなく、農法なども教え合ったりしていました。「収穫は、その家のためのもではない。里の者みんなのためであり、収穫はみんなで分かち合う。」という本文にもあるように、協力し、助け合うことが大切だと気づかされました。また、自分だけが幸せになるのではなく、みんなの幸せを求めることが大切だとも感じました。

私の祖父は畑を2つ持っています。私の家は自営業なので、お客さんが入れ代わり立ち代わり来てくれ、祖父もその人達とよく畑や野菜の生育状況について話をしています。また、畑で穫れた野菜や果物、卵などをもらったり、あげたりしています。本の中に描かれていたことが、すでに自分の

### 文芸部門・散文 銀賞

『越中万葉百科』を読んで

### 家持のパレット

富山市立堀川中学校二年 松田 わこ

私は、大伴家持が私達のふるさと越中で詠んだ「越中万葉」を、夏休みにゆつくり読んでみようと思いました。三百首以上にもなる歌をせっかく残してくれたのだから、ふるさとがどんな風にか家持の目に映ったのか、知りたかったからです。

をみなへし咲きたる野辺を行きめぐり君を思ひ出たもとほり来ぬ

私が一番好きな歌です。この歌を読むと、おみなえしの明るい黄色が目には浮かび、それがゆつくりと私の全身を包んでいくようです。この黄色には不思議な温度のようなものがあり、なんとなくポカポカしてきます。

もののふの八十娘子らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花

私が二番目に好きな歌です。小さな堅香子の花の淡いピンク色が、モーツァルトの旋律のように私の心をも優しくしてくれます。

私は、楽しいことを思いつきました。それは、それぞれの歌に出てくる花や植物、自然などにより、三百三十七首を色分けしてみるということです。例えば

ぬばたまの夜はふけぬらし玉くしげ二上山に月は傾きぬ

は「月」がテーマなので、黄色のグループにしました。

立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし

夏も立山に残る「雪」は、もちろん白のグループです。

身近なところで当たり前のように続けられていたことに驚き、とても嬉しく思います。また、自分の祖父も助け合っていることを誇りに思っています。都会では、下町などを除いてマンションや住宅街が多く、ご近所付き合いがなかったり、地域の行事が少なかったり等、交流もあまりない点で人と人との関わりが薄いと思います。ですが、都会も田舎もそれぞれに良い点、悪い点があります。私は、富山県に関して冬は寒く、遊ぶところも少ない田舎であり知られていないし、交通の便も悪いので閉ざされたイメージで嫌だなど思っていました。ですが、この本を読んで、生活の便利さに関しては良い点ばかりではないのですが、そこに住む人々の心にとても魅力を感じました。昔からの美しい自然環境がたくさん残り、今も続いているからかもしませんが、それは素晴らしいことだし、私たちもその環境も精神も守り、受け継いでいかなければならないと思います。また、個人にとられず、周りの人々と協力する姿勢も受け継いでいかなければならないと思います。

この本を読んで、田舎の良さを改めて見直し、そこに住む人の考え方にたくさんふれることができたと思います。将来、富山にずっと住んでも都会に出て、助け合いの心を忘れず、人と人とのつながりを大切にみんなのために行動できるような人になりたいです。



おおかみこどもの雨と雪

細田 守 / 著 角川文庫  
大学生の花は、おおかみおとこに恋をし、雪と雨の姉弟が生まれる。都会の片隅でひっそりと暮らす四人だが、おおかみおとこの死を機に、田舎町に移り住む。映画原作にして細田守監督初の小説。

色分けをしていくと、まず多いのが白の歌です。家持は、雪を歌の題材にすることが多く、他にも白い花の歌がありました。また、海や川を歌った歌も多く、青の歌も目立ちました。また、家持は花が好きだったのか、ピンクや黄色、赤のグループも多くありました。

しかし、色分けが難しい歌もありました。それは、直接越中の自然などを歌の題材にしていない、家持の「心」を歌っている歌です。私が勝手に、「悲しい」は青のグループ、「うれしい」はオレンジのグループというふうに、イメージで判断することはできません。その上、気持ちを歌い込んでいるものには、歌の表面には表れていない心の奥の世界がある感じがして、十四歳の私にはとうていわからない「心の色」もある気がしました。でも、自分の心を歌に表現する家持は、とても素直な人なのではないかと感じました。心の中なんて、本当はかくしておきたいと、私なら思うからです。

色分けすることができた越中万葉を読み返してみると、わかったことがあります。それは、家持が富山の自然を愛してくれていたということです。奈良県から富山に赴任して、家持の心のパレットは色あざやかになったと思います。今まで描いたことのないさまざまな色の絵の具で、家持が歌を残してくれたのだとしたら、とてもうれしいことだと思います。もしかしたら、今は難しい「心」を詠んだ歌も、私がたくさんを知り、いろいろな気持ちを理解できるようになった頃、色分けができるかも知れません。夏休みに知った家持のパレットを、もっと研究してみたいです。



越中万葉百科

高岡市万葉歴史館 / 編 笠間書院  
大伴家持らが越中赴任中に詠んだ歌など、とやまに関わる歌を一冊にまとめ、それぞれに解説を加えた。「万葉集」の中でも、幾外では最多となる三百三十七首の「越中万葉」の文学的価値とともに、北陸の自然にふれて大きく開花した大伴家持の歌作りの心に迫る。

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで  
**おおかみこどもの雨と雪**

富山西高等学校一年 齊藤 華那

この物語はおおかみの子ども「雨」と「雪」を花という主人公が育てるといふ物語です。

この作品を読んで私が思ったことは、四つあります。  
 一つ目は母という存在の偉大さです。花は一人で二人の子ども、しかもおおかみの子どもを立派に育てあげました。私は、まだ母親という立場に立ったことはありません。でもこの作品を読んでいくと子どもを育てる大変さがひしひしと伝わってきます。ですから、そんな大変な思いで育ててくれた自分の母親も花もとても尊敬します。花は子どもたちの話をしっかり聞いてくれます。私も、もし子どもができて母親という立場に立つたら、花や自分の母親のように色々がんばりたいと思いました。

二つ目は花の人物についてです。花は一人の女性としても、母としても、とても魅力的な人だと思っています。まず一人の女性としては、明るく謙虚なところが良いと思います。花はどんな事でも素直に受け入れ、常に努力を惜しみません。私はそんなところが好きです。そして母としては、一人でも強く、何事にも前向きで子どもたちに不安を感じさせないところが良いと思います。花の子どもはおおかみの子という事もあり、色々他人から怒りを買ってしまうことがあります。それでも花は強く立ち向かっていきます。そして子どもたちが少しでも楽しく生活できるように不安をあまり表に出さず、なおかつ子どもたちにも感じさせません。私は花のそんなところがすごいと思うし憧れます。今の私が母親になったら、そんな立派な事はきっとできないと思います。だから私は大人になるまでに花のような人柄になりたいと思います。花は、誰かに何か陰口を言われてもめげずにいます。きっと、私とその立場に立つたら、すぐに落ち込み立ち直れないと思います。主人公「花」の名前の由来に、花のように笑顔絶やさないという意味が込められています。それで、花はつらいときや苦しいときでも笑って

います。その精神力をととてもすごいと思います。それに花の父のお葬式の時も、「不謹慎だ」と言われても全く動じません。そんな心の強いところも見習いたいです。

三つ目はおおかみの「彼」のことです。おおかみの彼は無愛想で無口、あまり喜怒哀楽を顔に出しません。でも、とても花のことを思いやっていて優しい心の持ち主です。おおかみの彼は、物語の最初の方にしか登場しません。しかし、その短い話の中でも彼の優しさが心に響きます。一番、私が心に残ったのはベッドから動くことのできない花に対して「一晩中そばに付き添い、自分で捕ってきたキジで料理を作ったところ」です。その場面を読み私が思った事は、当たり前前の事なのかもしれないですが、愛し合っているなという事とおおかみの彼はとても心が広いという事です。料理をしている彼に花が手伝おうかと聞くと彼はいいと言って、これは二人が思い合っていないとできない事だと思いました。

四つ目は小説で表現されている自然です。この作品の舞台になった富山の自然の良さがとてもわかります。色々な生き物の名前などが出てきて興味をわきました。さらに小説で表現されている富山の自然を読むと、実際にその場所にいるような不思議な気持ちになります。暑い時などに読むと涼しい気持ちにさせてくれます。私はそんな富山の自然が大好きです。また、擬人法や直喩法、比喩が使われていて、読んでいて面白かったです。

私はおおかみこどもの雨と雪を読み、母親の偉大さや富山の自然など色々なことを知り学べました。その学んだことをこれからの生活に生かしていきたいと思いました。

『サマーウォーズ』を鑑賞して  
**『家族とのつながり』を大切に**

高岡高等学校二年 古田 彩乃

私が鑑賞した映画は、細田守監督の『サマーウォーズ』です。この映画はアニメーション映画で、綺麗な作画がとても目を引く作品です。内容は、ひよんなことから田舎の一族と夏休みを過ごすことになった十七歳の主人公健二が、仮想空間に端を発した世界崩壊の危機に立ち向かうというもので、家族の絆を軸に迫力のアクション満載で描かれています。長野県上田市が舞台となっており、富山県の要素はどこに入っているのかと思う人もいるかもしれませんが、この作品の監督の細田守さんは富山県出身なのです。この方は『おおかみこどもの雨と雪』という富山県上市町の山里を舞台にした別のアニメーション映画を制作するなど、とても富山にゆかりのある方です。『サマーウォーズ』の冒頭の部分で、富山県が例として紹介されているところがありますが、遊び心があつて私のお気に入りのシーンの一つとなっています。また、親族が一堂に会するシーンでは、雰囲気ごとくなく富山県の田舎のイメージを感じさせ、とても親近感がわきました。

この映画を鑑賞して、一番感じたものは「家族とのつながりの大切さ」です。この映画に出てくる陣内家の一族は、どの人が誰とどんな家族構成であるのかわからなくなってしまうくらい人数が多く、覚えるのも大変ですが、個性が豊かで、何よりみんな楽しそうです。私の家の親族は、お葬式や法事のとときにしか集まることはありません。それに、集まったとしても、年に数回しか顔を合わせることはない人達であるため、私は人見知りをしてあまり話すことができません。正直、気まずくて居心地が悪いです。しかし、陣内家の人々には和気あいあいとコミュニケーションをとっていて、とても楽しそうでした。なぜこんなにも違うのかと考えてみると、陣内家の人々は「つながり」を大切にしていることがわかりました。例えば、おばあちゃんの誕生日を祝うために集まったり、自分から話しかけに行ったり、一緒に遊んだり、一緒に食事を作ったり、それを

一緒に食べたりなど、何気ないことですが、そのようなたくさんの小さな「つながり」を日々大切にしているのです。私は、その小さな「つながり」を積み重ねていくと、それがいつしか大きな「つながり」となり、いつの間にかそれは信頼へと変わっていったのではないかと考えました。また、物語の重要な人物であるおばあちゃんとその夫の隠し子であった侘助との「つながり」も強く感じられました。幼少期、複雑な家庭環境から心を閉ざしていた侘助に、おばあちゃんは少しずつ、でも確実に侘助との「つながり」を自分からもととし、それが大きくなって侘助が一族とわだかまりをもった今でも、二人の間の「つながり」が、確かな信頼関係となって残っているのです。

『サマーウォーズ』を通して、「家族とのつながり」がこれほどまでに大切な素敵なものであるということを改めて知ることができました。

核家族が増加している現代、「親族とのつながり」を持つことはおろか、親族自体が集まることさえ難しくなっています。そのような中で、私は数少ない会える機会をもっと大切に、自分から「つながり」をもてるようになりたいなと思いました。



サマーウォーズ

岩井 恭平/著  
 細田 守/原作 角川文庫  
 数学しか取り柄がない高校生の健二は、憧れの先輩・夏希に、フィアンセになるバイトを依頼される。そのまま向かった先は、室町時代から続く戦国一家の大家族の家だった。新しい家族の絆を描くさわやかな物語。

『劔岳点の記』を鑑賞して

「劔岳」を見て

富山高等学校二年 松下 千紗

私は、劔岳に興味を持っていた。それは、普段は何事も恐れない父が、劔岳の登山は怖いと言っていたからである。道がわかっている現在でさえ危険を感じる山なのに、昔の人はどのようにして登り、どれほどの苦労があったのだろうか。このようなちよつとした好奇心から、私はこの作品を鑑賞した。

私は主に二つのことが心に残った。一つ目は、作品の壮大さである。見たことのある景色はもちろんあったけれど、ほとんどが初めて目にする風景であった。太陽、雲、雪、川、水、崖、岩、草木、動物など、立山にあるすべてのものが自然の厳しさと美しさを生み出していた。映像を通してだけでなく、実際に自分の目で見て肌で感じたいと思った。私は、改めて自分の住んでいる立山の自然の厳しさと美しさ、そして自然と心を通わせてきた人々を誇りに思う。ますます自分の生まれ育った町のが好きになった。

二つ目は、「何を成し遂げたかではなく、何のためにするのかが大切なのだ。」という言葉だ。作品の中で、軍人が初登頂でなければ意味がないと考えていたけれど、私は違うと思う。軍人は、結果しか評価していない。もし、初登頂しか価値がないのだとしたら、彼らが劔岳を登頂したことに価値がなくなってしまう。彼らは、登頂後に自分たちが初めてでなかったことを知っても、すがすがしい顔をしていた。それは、彼ら一人ひとり目的があったからだと思う。ある人は、自分の生まれた世界を知るために。ある人は、地図をつくるために。ある人は、山に登りたい人の願いを叶えるために。この目的があったからこそ、初登頂ではなかったけれど、価値のある挑戦になったのだと思う。そして、この目的はあきらめずに試行錯誤して挑み続ける原動力となったのだと思う。

もちろん、彼らが登頂できたのは、一人ひとりに目的があったからだけではない。雪崩や落石、転落、吹雪、強風などのさまざまな危険と困難の中で、心が折れそうになったと思う。それでも頑張ることができたのは、家族の支えと協

力し合える仲間の存在があったからだと思う。そして、ライバルの存在も大きいと思う。最初は、お互いに対立していたが、最後には、相手のことを尊敬する山岳会の人々と、相手のことを仲間として認める測量隊の人々が旗でその気持ちを伝えていた。私は、とてもすがすがしい気持ちになったし、感動した。今私たちが山に登り、自然の壮大さを肌で感じることはできるのは、このような人々の困難と努力の上に成り立っていることを決して忘れてはならない。感謝の気持ちでいっぱいである。私は、今後も立山の自然と山に挑んだ人々を誇りに思つて、この富山を愛したいと思う。また、作品を通して学んだ「何のためにするのか」ということを意識して、果敢に挑戦してあきらめずに努力し、価値のある経験をしていきたい。



劔岳 点の記

新田 次郎 / 著 文藝文庫刊

日本地図を完成させるため、不可能と言われた初登頂と山岳測量に取り組んだ主人公らの不屈の努力、山を愛する人々の友情を描く。山頂で発見された千年前の錫杖が解けない謎として心に残る名作。映画化された。

文芸部門・詩 金賞

「いつか見た青い空」を鑑賞して

高岡高等学校二年 宅美 明香里

炊きたての白い米

庭の桜の薄いピンク

「元氣だよ」の赤い丸

小さなドロップの緑や黄色

舞い上がる火の粉のオレンジ

逃げまとう顔の黒いすず

まぶしいほど真っ白な軍服

その色の背中を見つめる家族の

くすんだ茶色のもんぺ服

そして

泣きたいような笑いたいような

終戦の日の青い空

希望の色と絶望の色

背中合わせとなって

日常を彩っていた

いつか見た青い空

向田 邦子 / 原作  
久世 光彦 / 演出

戦後60年を記念して、向田邦子の遺した小説・エッセイをもとに制作されたTVドラマ。演出は、富山県ゆかりの演出家、久世光彦が担当。昭和20年8月15日の抜けるような青い空をそれぞれの思いで見上げた母親と三人の娘たちの複雑な心模様を、鮮やかに描き出している。

文芸部門・詩 銀賞

『アネクラヒメとイスルギヒコ』を読んで

春霞

富山中部高等学校一年 澤川 珠希

山と山

二つの間の距離さえも

想いがあれば越えてゆく

ただ春霞はすべてを隠す

貴女は見えぬ未だ見えぬ

貴方は見えぬ未だ見えぬ

ただ春霞はいつかは晴れる

貴方は変わった

変わってしまった

貴女は変わった

変わってしまった

泣きたくても泣けなくて

すべてが震えて見えなくて

揺れる視界に入るのは

逃げ惑うだけの獣たち

霞む視界に入るのは

遠くて青い山だけで

さあさあそろそろ

眠りましょう

役目はそろそろ終わるから

さあさあそろそろ

眠りましょう

夢では貴方に会えるから

文芸部門・詩 銅賞

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで

巡る旅の記憶

富山中部高等学校一年 伊藤 友

肌を切る冬の風

深々と咲き誇る雪の花

町の空気を白く染め上げる

肌を撫でる春の風

凍った町を溶かし彩り

青々とした空には霞む朧雲

雲は、しばしば涙を流し

川は轟々とのたうち回り

いつしか暴れ疲れて静まって

一つすくって口に含めば

体を巡って繋がって

心は共に旅に出る

暗く黒く冷たく造々とした海

その切れ目から射し揺らめく朝日に

出会い、別れ、そして巡る

文芸部門・詩 銅賞

『とべないホタル』を読んで

とべないホタル

富山市立和合中学校三年 冬木 翔大

川端に

乏しく光る

小さな灯

ひとりさびしく

星を眺める

翔けど

捻れた羽は

動かない

翔びたつ友の

光を眺める

人影に

小さな灯火

飛び込んで

微笑む友に

涙を堪える

夏の空

夜空に翔びたつ

蛍の灯

友の絆と

共に輝く

この一冊

富山県の民話  
日本児童文学者協会／編 備成社  
「アネクラヒメとイスルギヒコ」  
「池の主になつた尼」等秘境異部  
五箇山、霊山立山連峰、そして急流  
が平野をくだり富山湾へそそぐ「越  
の国」越中の、富国らしい光と影を  
たたえた民話33選。

この一冊

とべないホタル  
小沢 昭巳／著 ハート出版  
羽が曲がってとべないホタルが仲間  
たちに助けられ、新しい光を放つ童話。  
富山の教員であった作者が、子どもた  
ちに託した願いから生まれた物語は、  
全国の人々に共感され、感動を呼んだ。  
アニメ化された。

文芸部門・短歌 金賞

『月影ベイベ』を読んで  
おわら風の盆

富山高等学校二年 常盤 果歩

笠の中

思いを隠し

風の盆

月夜の中に

浮かぶ踊り子

文芸部門・短歌 銀賞

『富山の風景』を読んで  
桜ヶ池

中央農業高等学校二年 平松 直己

山深き

桜ヶ池の

花筏

揺れる水面に

へらぶなの影

この一冊



月影ベイベ  
小玉 ユキ／著 小学館

伝統芸能。おわら。を守り継ぐ、情緒溢れる地方の町、富山市八尾を舞台に吹き込む謎と秘密の風。富山弁で語られるセリフや、背景、空気感など情緒と青春がしなやかな感性と細やかな視点で描かれている。

この一冊



富山の風景  
大島 文雄／著 新興出版社

富山大学名誉教授であった著者が、富山の風土と人々、日本人の美意識に関わる視点からの問題提起、人を想う心などを新聞社などに寄稿した四十三の随想が収録されている。

文芸部門・短歌 銀賞

『富山の風景』を読んで  
白海老

中央農業高等学校二年 正橋 萌香

白海老は

心透き通る

輝きで

真夏の海に

淡雪降り

文芸部門・短歌 銅賞

『劔岳(点の記)』を読んで  
千年の歴史

富山高等学校一年 石坂 泰葉

神の住む

岩の剣に

千年の

足跡残す

地図の一点

文芸部門・短歌 銅賞

『おおかみこどもの雨と雪』を読んで

雨

進むべき

道を定めし

眼差の

強さは冬の

剣にも似て

富山高等学校二年 浦田 彩乃

文芸部門・短歌 銅賞

『里の祭り』を鑑賞して

秋祭り

里山の

五穀豊穣

獅子舞で

神に感謝し

秋晴れの空

射水市立新湊南部中学校二年 大坪 航瑠

里の祭り (油彩作品)

古川 通泰

闇の濃さと夕焼けの紅さと、ぼっかり浮かぶ月影の非現実感が印象的な作品。制作者は、富山県高岡市出身。日本国内外において、個展を中心に作品を発表し、強烈な色彩とローカル色の濃い作風に定評がある。晩年は、富山市八尾桐谷で創作活動を行う。

文芸部門・短歌 佳作

『月影ベイベ』を読んで

おわら風の盆

月の夜に

流れる胡弓と

おわら節

かさにかくした

祈りと誇り

射水市立新湊南部中学校二年 林 花梨

文芸部門・俳句 銀賞

『納棺夫日記』を読んで

「生と死の美しさ」

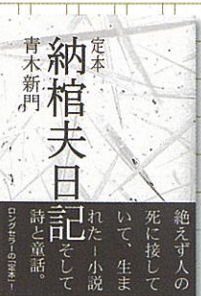
霽ふる

今宵も生と

死を見つめ

射水市立小杉中学校三年 松城 奈々花

この一冊



納棺夫日記

青木 新門 / 著 桂書房

死者の体を清め棺に納める仕事に就いた著者が、死にゆく人の穏やかな顔や感謝の言葉に、人間の命の本質を悟っていく。著者の静かなる声がか心に残るロングセラーとなった。詩と童話を付した定本。



文芸部門・俳句 銅賞

「いつか見た青い空」を鑑賞して

戦時中の家族

高岡高等学校二年 笹谷 昌世

ひとつの

戦火の中に

家族の輪

文芸部門・俳句 佳作

「富山の風景」を読んで

砺波平野

中央農業高等学校二年 安念 龍二

夕暮れや

青田輝く

散居村

文芸部門・俳句 銅賞

「時を呼ぶ声」を読んで

富山の思い出

富山高等学校二年 高島 彩実

飛騨街道

白い吐息が

映える空

美術部門



美術部門 知事賞

「眼差し」住田 菜々花 (小杉高等学校 1年)  
<沈黙の森> 594 × 420

【凡例】 部門名  
題名/名前 (学校名・学年)  
< >は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm

沈黙の森

北日本新聞社編集部/編 北日本新聞社  
民家を興ったツキノワグマによる人身事故を発端に、山や  
森で進みつつある自然の荒廃を探る。二〇〇五年、石橋湛山  
記念早稲田ジャーナリズム大賞受賞作品。



美術部門 銀賞

「険しき山」中西 花奈 (富山北部高等学校 1年)  
 <剣岳<点の記>> 420 × 592



美術部門 金賞

「少女と葦附」前田 綾香 (小杉高等学校 2年)  
 <越中万葉百科> 420 × 592



美術部門 銀賞

「環水公園」毛利 菜那子 (富山北部高等学校 1年)  
 <アオハライド> 420 × 592

この一冊

アオハライド

中学生時代の初恋の少年と高校で再会し、変わってしまった彼に戸惑いながらも再び恋愛感情を育んでいくヒロインの姿を描く。アオハライドとは「青春（あおい）はるかに懸命に「乗って（ライド）」いこう」という意味をこめた作者による造語。テレビアニメ化され、富山をとろけ地として映画も撮影された。

咲坂 伊緒 / 著 集英社  
 三木 孝浩 / 映画監督



美術部門 銀賞

「いたち川」土岐 旭 (富山中部高等学校 3年)  
 <螢川> 606 × 500

この一冊

螢川・泥の河

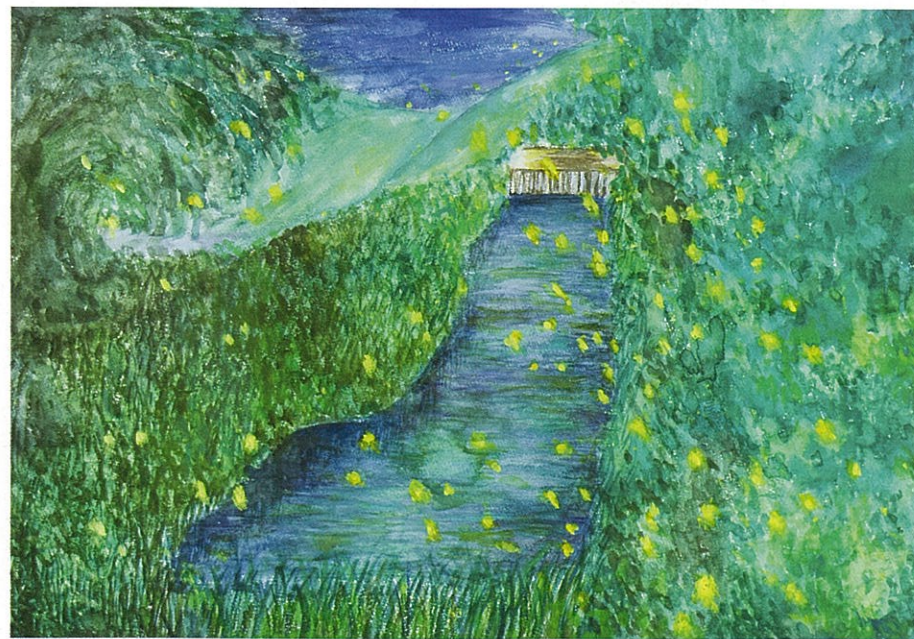
宮本 輝 / 著 新潮文庫刊

昭和三十年代の富山県を舞台に、父親の事業がうまくいかない中で、少年の淡い恋の目ざめと人間の成長を描く。雪国ゆえの豊かな水の描写や、春の喜びとともに螢の乱舞する情景は圧巻。芥川賞を受賞。



美術部門 銅賞

「庭」時澤 美玲 (富山北部高等学校 2年)  
 <おおかみこどもの雨と雪> 410 × 318



美術部門 銅賞

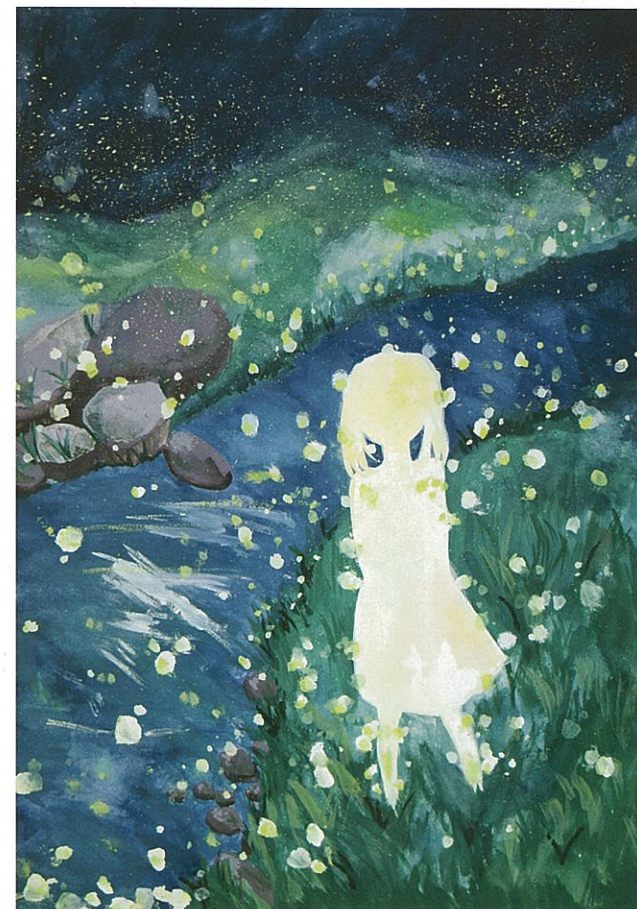
「優曇華の花」森 真緒 (小杉高等学校 1年)  
 <螢川> 420 × 592

この一冊  
 田園発 港行き自転車 上・下  
 宮本 輝 / 著 集英社  
 富山県の滑川駅の前に残された台の自転車。亡き父の足跡を辿ると、出会うことになった人々との縁が広がりはじめる……。美しく豊かな富山の地を舞台に人々の絆を描き出す、傑作長編小説。



美術部門 銅賞

「星月夜」阿部 泉 (小杉高等学校 1年)  
 <田園発 港行き自転車 上・下> 594 × 420



美術部門 銅賞

「螢川」石坂 光 (富山北部高等学校 1年)  
 <螢川> 594 × 420



写真部門 金賞

「利賀の春祭り」沖野 巽 (高岡第一高等学校 3年)  
<越中の民話 第一集・第二集> 257 × 364

この一冊  
越中の民話 第一集・第二集  
伊藤 晴寛他/著 未来社  
富山の民俗学者が多年にわたって採集したふるさとの民話、百八十話です。第二集は懐かしい富山弁で語り、わらべ歌も掲載。



写真部門 知事賞

「ひとりの時間」川尻 ちひろ (富山東高等学校 1年)  
<キトキトの魚> 364 × 257

この一冊  
キトキトの魚  
室井 滋/著 文藝春秋  
とやま井の「キトキトの魚」のように元気で健気な少女時代、自信過剰な一人っ子時代、事件を呼ぶ女と呼ばれた青春時代。女優として大活躍する著者の面白くも切ないエッセイ。

【凡例】 部門名  
題名/名前 (学校名・学年)  
< >は原作 サイズ (タテ×ヨコ) mm



写真部門 銀賞

「記憶の片隅」金沢 媛歌 (富山東高等学校 2年)  
<大人になる前に身につけてほしいこと> 364 × 257

この一冊  
大人になる前に身につけてほしいこと  
坂東 眞理子/著 PHP 研究所  
ちよつとした心の持ち方次第で、大きく開ける人生。富山県出身でベストセラー『女性の品格』の著者が、自分の半生をふりかえり、すてきな「大人」になつてほしいと願つて綴つたメッセージ。

この一冊

新編 山と溪谷

田部 重治 / 著 岩波書店

「山が自分の一部であり、自分が山の一部というふうな心持になる」——数多くの読者を山に誘った我が国山岳文学の古典といふべき「山と溪谷」など、英文学者・登山家田部重治の随筆・紀行文集から精選。



写真部門 銅賞

「日本三霊山(立山)」小笠原 歩 (呉羽高等学校 1年)

<新編 山と溪谷> 364 × 257



写真部門 銅賞

「それから…」上嶋 菜々 (富山東高等学校 2年)

<大人になる前に身につけてほしいこと> 364 × 257



写真部門 銀賞

「心影」高木 美慶 (富山高等学校 2年)

<螢川> 300 × 400



写真部門 銀賞

「休漁日」米島 菜津美 (高岡第一高等学校 1年)

<富山湾を科学する> 364 × 257

この一冊

富山湾を科学する

富山県水産試験場 / 編 北日本新聞社

数千年をかけて地球を巡る深層水が流れ込む、神秘の海、富山湾の海洋構造や漁場環境、魚の生態などを詳しくビジュアルで紹介。



写真部門 銅賞

「静かな時間」吉村 奈菜 (富山東高等学校 2年)  
 <大人になる前に身につけてほしいこと> 257 × 364

この一冊  
 春を背負って  
 笹本 稜平 / 著 文藝文庫刊  
 奥秩父の山小屋を舞台に、山を訪れる人々が抱える人生の傷と再生を描く感動の山岳ヒューマン小説。2014年に映画化された。立山連峰で長期のロケを行い、山々の光景を映し出した映像は圧巻。



写真部門 銅賞

「桜の絨毯」長井 志保 (泊高等学校 2年)  
 <春を背負って> 257 × 364



写真部門 佳作

「大伴家持と放生津八幡宮」山下 和馬 (射水市立新湊南部中学校 2年)  
 <万葉集> 257 × 364



写真部門 銅賞

「マシュマロ発掘」矢坂 怜奈 (南砺福野高等学校 3年)  
 <イラストでつづるとやまのれきし> 420 × 297

この一冊  
 イラストでつづるとやまのれきし  
 アド・パルス / 著 アド・パルス  
 原始時代から現代まで、とやまの暮らしをわかりやすいイラストで紹介。







平成28年1月発行

**平成27年度「高志の国文学」情景作品コンクール入選作品集**

編集・発行／富山県教育委員会生涯学習・文化財室

〒930-8501 富山市新総曲輪1-7

TEL：076-444-3434 FAX：076-444-4434

ホームページ [http://www.pref.toyama.jp/cms\\_sec/3009/index.html](http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/3009/index.html)